

杜甫とその時代

松 原 朗

杜甫は、詩を引っ提げて世界に立ち向かった。

これは杜甫のために思いついた比喩ではなく、ありのままの事實である。杜甫は、詩の力で世界を變えることができる信じ、天下の政治も社會の不義も詩の力で正すことができる信じ、おそらく中國の文學史上にただ一人の詩人だった。

(一) 杜甫の生涯

杜甫が生きた盛唐は、大唐が太平を謳歌した時代だった。しかしその光輝に満ちた半世紀の時代は、玄宗治世の末年に起こった安祿山の大亂によって奈落の底へと突き落とされた。長安の都は鐵騎の蹄に蹂躪され、玄宗はほうほうの體で成都へと都落ちする。杜甫は、太平の頂點からこの破滅までをその一身に體驗し、杜甫の文學は、その未曾有の顛末を反映することで稀代の文學となった。

盛唐は玄宗（在位七一二年〜七五六年）の時代であり、杜甫は奇しくも玄宗即位の年に生まれ合わせた。しかもこの時期は近體詩（律詩・排律・絶句）の形式が成熟する時期に当たっていた。文學史に近體詩の完成者として記憶される沈佺期和宋之問は、杜甫生誕の前後に相次いで亡くなった。こうしてできあがったばかりの近體詩を背負うようにこの世に生を稟けた杜甫は、玄宗の盛唐という輝かしい時代に成長し、やがて安史の亂（七五五〜七六三）の渦中で玄宗が退場するのを追うようにその生を閉じる。一つ一つはただの偶然にすぎないこのような巡り合わせが、杜甫という中國史上にただ一人の詩人を作り出したたのである。

杜甫、字は子美。「甫」は卓越した男子。字にある「子」は男子の尊稱、大きな羊を表す「美」は卓越を意味して、「子美」によって名の「甫」と釣り合いを取る。杜甫は、前漢に溯る一

族の故郷を長安の南の杜陵（また少陵）と考え、中年に長安に移り住んでからは「杜陵の翁」「少陵の野老」などと自稱した。後世の杜少陵の稱は、ここに由来する。また檢校工部員外郎を授けられたので、杜工部とも稱される。

杜甫は、誇り高き家柄に生まれている。西晉の將軍にして儒學者であった杜預の十三代の子孫をもって自任し、祖父に則天武后朝の高名な宮廷詩人である杜審言を持つことを誇りとした。もっとも一族は、父親の杜閑が中堅の地方官に終わるなど杜甫の代には没落していた。杜甫がまだ無官の時代に玄宗に献上した「鷓鴣の賦」は、序文に「臣の近き代は陵夷（没落）せり」と述べている。こうして杜甫は、名家の再興を己れの務めとして引き受けることになる。

○ 少青年期

杜甫は、洛陽で生まれた。洛陽は唐代には、長安を西京と稱するのに対して東都と稱された。副都である。しかも直前の則天皇帝（武后）の時期には、洛陽を神都と稱して首都機能を長安からここに移していた。また洛陽は、江南から大運河を通じて運ばれてくる物資の集散地として、經濟の繁榮は西の長安を凌駕するほどであった。杜甫はこの首都の名残のさめやらぬ華やかな洛陽で少年時代を過ごし、ここに邸宅を構える貴族や名士たちと交友を結んだ。また二十代になると長江下流の吳越

（江蘇省・浙江省）まで足を伸ばし、黃河下流の齊趙（山東省・河北省）も数年の時間をかけて漫遊した。これは當時の知識階層の若者の風尚であったが、杜甫についていえば生涯を通じた放浪癖の萌芽でもあった。

三十という而立の歳を節目に、杜甫は氣ままな生活に區切りを付けて、洛陽の故郷で遠祖の杜預を祭って思いを新たにし、楊氏の娘を娶って身を固めた。ただ三三歳の夏に、宮廷から放逐されたばかりの詩名赫赫たる李白（當時四四歳）とたまたま洛陽で出會い、一年餘り連れ立って遊ぶこともあった。奔放飄逸と稱される李白の闊達な文學を目の當りにすること、杜甫はかえって自分の個性に目覺めたことであろう。

○ 長安期

三十代の半ばになると本腰を入れて仕官の道を求め、生活の據点を長安に移して顯貴の人々に詩を贈って自己を賣り込むなど奔走することになる。科擧の受験については、杜甫自身の發言が少ないうえにわからないことが多いが、二十四歳で吳越の漫遊から洛陽に歸ったときに、初めて科擧を受験して落第したらしい。また三十六歳で皇帝主催の科擧の特別試験である制科を受験しようだが、この時は宰相李林甫の陰謀で受験者は全員が落第となった。この時に李林甫の曰く「野に遺賢（打ち捨てられた賢者）無し」と。

それにしても當時の官僚の登龍門である科擧になぜ杜甫が及第しなかったのかは、大きな謎となっていた。杜甫の詩は、夥しい量の典據を自家藥籠中のものとして作られており、その博學ぶりは誰の目にも明らかである。あまり要領が良さそうにもない杜甫が試験で苦勞するのは想像できるが、要領の悪い詩人は杜甫だけでもなかった（杜甫の一世代後輩に當たる詩人の孟郊はおおよそ社會生活を營むには不向きな意固地な人物だったが、それでも科擧ぐらひは及第した）。またその文學が反骨の精神に富むとはいっても、少なくとも仕官について、杜甫は割り切った處世を取ることでもできた。杜甫が當時の顯貴に呈上した詩篇などは、この人が狷介孤高の生き方だけを事としなかったことを證している。

そもそも杜甫が科擧に及第しなかったのは、杜甫が科擧をほとんど受験しなかった結果であり、それも杜甫が科擧に大きな興味を持っていたかたためと考えるべきなのだろう。當時役人になるには科擧や、科擧の特別試験である制科以外にも「獻賦」というもう一つの方途があり、おそらく杜甫はそこにかけて。朝廷には延恩甌（皇帝の恩澤を延める甌）という投書函が設けられており、ここに詩文を投函する。もし皇帝の勸覽に浴すれば召し出されて中書試とよばれる高官たちの面接試験を受け、結果次第では任官やそこまで行かなくても任官資格が与えられるという制度である。ちなみに唐代の科擧は宋代以降とは

杜甫とその時代（松原）

異なっており、及第者に任官資格を與えるものであり、任官のためにはさらに守選という三年の準備期間において吏部の選考（吏部銓試）を経なければならなかった。長安で五年目となる杜甫が三九歳の時に玄宗に「鵬の賦」を献上したのは、この延恩甌への獻賦である。その後、杜甫は繰り返し皇帝に賦を献上した。おそらく杜甫には、自分だけは特別だという自尊心があって、大勢の受験者と十把一絡げの扱いを受ける科擧の受験を潔しとしなかったのではあるまいか。

第一回目の獻賦となる「鵬の賦」は梨のつぶてに終った。しかし翌天寶十載に献上した「三大禮賦」は晴れて玄宗の目に止まり、集賢院に召されて高官たちの面接試験を受けて合格となる。杜甫の期待に反してただちに任官とはならず、三年間の守選が言い渡された。七五四年の秋に長安は三カ月もの長雨に見舞われて物價は騰貴し、杜甫は生活に窮して妻子を長安の北の奉先縣（陝西省蒲城縣）の縣令楊慧（妻の親戚）のもとにあずけることになる。

守選期間も明けた七五五年の冬、四十四歳にして右衛率府胄曹參軍という東宮づきの末官を授けられる。この時の「官定りて後に戯れに贈る」0119（四桁數字は『杜詩詳注』に據る杜甫詩の通し番號）という作には、杜甫の屈折した思いがにじんでいる。しかもあたかもその時に安祿山の亂が勃發して、翌年六月には長安も陥落し、官もあえなく失うことになる。「長

安十年」とよばれる杜甫の苦節の生活はこうして破局の中で終るのだが、その中で杜甫は社會に蔓延する權力者の不義を凝視し、不義の下にあえぐ庶民の生活を凝視した。「兵車行」0148、「麗人行」0158などの現にそこにある事件を捉えた政治批判詩は、杜甫以前には見当たらない新しい文學の領域であった。

㊦ 亂中期

七五五年一月、節度使安祿山が本據地の范陽（北京市）で反亂を起こした。安祿山の死後は部將の史思明によって引き繼がれるので、安史の亂とも呼ばれることが多い。唐の軍隊は外敵の侵入に備えて邊境に配置されており、内地は無防備だった。安祿山の反亂軍はその虚を突いて、翌一二月には東都洛陽を陥落させ、長安はたちまち嚴戒態勢となる。老将哥舒翰は長安の東約二〇〇キロメートルの潼關を死守して膠着状態に持ち込むことに成功した。こうして敵の自壊を待とうとしたのである。しかし功を焦った宰相楊國忠（楊貴妃の又従姉妹）に嫉まれて、玄宗は哥舒翰に潼關から打って出るよう命じた。結果、六月九日に哥舒翰の率いる官軍は大敗し、一三日の未明、玄宗は禁軍に守られ宮中に居合わせた側近だけを引き連れて密かに長安を脱出した。翌朝になって取り残されたと思った官僚や庶民たちは恐慌状態に陥り、その數日後には反亂軍は長安を占領した。

杜甫は反亂勃發の直前に、右衛率府曹參軍の内示を受けた

ものと思われる。そして一二月、奉先縣にあずけている妻子のもとに歸省する。この時に作られたのが「京けいより奉先縣に赴く詠懷五百字」0129である。杜甫はすでにこの時點で、安祿山反亂の一報を知っていた可能性もある。

正月には長安に歸って右衛率府曹參軍に就任する。しかし反亂軍が迫り来る長安を脱して、五月には奉先縣の家族を引き連れて北に向かい、ひとまず白水縣の役人で母方のおじの崔氏に身を寄せるが、それも危険と見るやさらに長安から二百キロも北に離れた鄜州の羌村に妻子を避難させた。しかしもやは安全な土地はなかった。杜甫は反亂軍側に寝返った人々に捕らえられて長安に連行されることになる。

もっとも一介の下級官吏に過ぎない杜甫は嚴重に監視されることもなかったらしく、占領下の長安の有り様をつぶさに閲して詩に書き留めることができた。「國破れて山河在り」で始まる有名な「春望」0148、また「王孫を哀しむ」0149、「江頭に哀しむ」0155などはこの時期の代表的な作品である。至徳二年（七五七）の初夏になって杜甫は危険を冒して長安を脱出、新帝肅宗の行在所に歸參し、忠誠心を賞でられ晴れて左拾遺に抜擢されることになる。この左拾遺（従八品下）は見かけの官位こそ低いが、皇帝がみずから任命する敕授官であり、皇帝のお側に仕える供奉官でもあり、高級官僚への登龍門と目される衆人羨望の官職だった。皇帝を補佐して理想の政治を實現しよう

という杜甫の平生の願いは、ここに果たされるかに見えた。しかし杜甫は就任早々に、敗軍の責めを負って宰相を罷免された房琯ぼうがんを勇ましく辨護して肅宗の逆鱗に觸れた。その時は友人たちの辨護によって事なきを得たものの、ほどなく鄜州の羌村にいた家族のもとに歸省するように命ぜられた。實質的な謹慎處分である。「北征」0188は、この旅の感慨を述べた杜甫詩集の屈指の雄篇である。年末には長安が奪還され、杜甫は長安の朝廷で左拾遺の役目に復歸した。しかし翌七五八年六月に、肅宗の朝廷で非主流となった房琯派の排除に伴って、杜甫は華州司功參軍に左遷された。杜甫の轉落の始まりである。

杜甫は華州司功參軍の在任中に洛陽に出張し、故郷の陸渾りんてんすう莊の様子も見に歸った。陸渾莊の弟妹は戦亂を避けて離散しており、飼犬だけが家を守っていた。杜甫がこの時期、なぜ戦争地域にも近い洛陽に出かけたのか理由がわからない。そもそも歸省ぐらいで、地方官は任地を離れることはできないものである。杜甫は任地の華州で、舊知の將軍である李嗣業が安史の亂の討伐のために東征するのを見送った。このことはおそらく重要な意味を持っている。李嗣業は先の長安奪還の戦いで大功を立てた猛將であり、今度の戦いでも朝廷は彼の活躍に期待するところが大きかった。おそらく杜甫は、職務をうっちゃって李嗣業の後を追いかけたのであり、それも李嗣業に拔擢されて幕僚になることを期待したためと考えられる。李嗣業は節度使

杜甫とその時代（松原）

の權限として、幕僚を召し抱えることができた。しかし李嗣業は緒戦の突撃で思いがけず流れ矢に当たって斃れてしまった。しかも不運は重なるもので、官軍は鄴城の攻圍戦でまさかの總崩れとなり、杜甫は慌てて華州に引き返す。この歸路に、杜甫は長安防衛のために根こそぎ徵發される悲惨な民衆の姿を目撃した。杜甫の政治批判詩の頂點と目される「新安の吏」0254以下のいわゆる「三更三別」は、この時の見聞をもとに作られている。

華州司功參軍もやがて在任一年で辭官に追い込まれて、家族を伴って長安の西の邊境秦州に赴くことになる。後から見れば、これが死をもって終わる放浪の始まりであった。

④ 秦州と同谷

杜甫は華州を發つと西に向かい、長安に脇目も振らず素通りし、隴山と呼ばれる険しい山脈を越えて、秦州（甘肅省天水市）にたどり着く。この間、約一カ月の旅だった。

邊境の秦州は唐の最大の軍馬の生産地だったが、安史の亂の平定のために投入されて草原に馬の姿はほとんどなかった。また西域を守る軍隊も秦州を通して東の戦場に移動した。その隙を突いて、吐蕃（チベット）がこの方面に觸手を伸ばそうとする不穩な氣配もあった。秦州では、杜甫は日当たりの良い場所に茅屋を結んで隱遁することも考えて、長安以來の知友である

贊上人と連れ立って良い土地を物色して回りました。しかし結局、秦州の殺伐とした雰圍氣になじむことができず、三カ月でここを去ることになる。

秦州期は、杜甫の文學の晝期となった。豊麗な七言詩が姿を消して、ひたすら禁欲的な五言詩ばかりが作られた。しかもその五言詩は、病的なまでに研ぎ澄まされた神經によって隅々まで支配されていた。

杜甫は華州司功參軍を辭めた。その辭官が自發的か強いられたものかは、杜甫自身が語ろうとしないのでわからない。しかしこの語らないという事實が、この時の杜甫の狼狽と懊惱の深さをのぞかせている。華州から秦州に着くまでの約一カ月の旅において、ただの一首も詩を残していないことも、この時の杜甫の心中が異常な状態にあったことを暗示している。秦州の詩は、この「詩の死」ともいべき空白の後に復活したのであるが、世界には善意があつて自分の願ひに應えてくれるというそれまでの杜甫にはあつた確信が、この秦州の詩にはなくなつていた。皇帝に對する信賴の思ひは斷ち切られて、社會の不義を憎んだ政治批判詩も姿を消して⁽²⁾いた。

杜甫は、険しい秦嶺山脈を越えて南の同谷に向かった。チベット高原から張り出した秦嶺山脈は中國大陸を南北に分ける分水嶺であり、その北側を流れる渭水は黃河に注ぎ、南側の漢水は長江に連なつて別の世界に流れてゆく。「秦州を發す」⁽³⁾は

「大なる哉乾坤の内、吾道長く悠悠たり」の二句で締めくくられる。このとき杜甫は、これから自分の向かう未知の世界の途方もない大きさを思いながら、長安の朝廷とこれが訣別となることを予感していた。

同谷には樂園の甘い夢を見て來たものの、この眞冬の生活は悲惨だった。杜甫は同谷の生活に一カ月で見切りを付けて、あたかも十二月一日に、古來天險として知られる蜀の棧道に向かつて苦難の旅に上り、乾元二年（七五九）の年末に成都に辿り着くことになる。

④ 蜀中期

杜甫が幸運だったのは、明くる年の春に成都の町の西の郊外の浣花溪のほとりに草堂を營めたことである。今は成都の名所となつた「杜甫草堂」はその故地を整備したものである。

杜甫が手に入れた草堂は、從來想像されてきたような狭小で簡素なものではなく、友人から貰ひ受けた數百本の果樹、それに松や竹も植えても餘るほどの面積があり、優に一個の莊園の規模があつたと推定される。杜甫は大きな草堂の敷地を、數年がかりで整備した。それにしても不思議なのは、杜甫はいかにしてこの草堂を取得できたのかである。手に入れた土地の廣さも、また當地の役人たちから草堂に贈り届けられた果樹の苗木や器物（磁碗）の數々も、無官の身に成都に流れついた詩人が

受け取るには分不相應の待遇だった。杜甫の前に強力な支援者が現れたとしか考えようがないだろう。そしてその人とは、裴冕以外ではないだろう。裴冕は、このとき成都府長官で西川節度使を兼ねる蜀中の最高権力者だった。杜甫はこの肅宗朝の元勳である人物と、鳳翔の行在所で知り合っていたものと思われる。杜甫が、蜀道の難所の最後にあって成都平野が一望できる鹿頭山で作ったのが「鹿頭山」0383であり、その末尾には裴冕を賛美して「冀公は柱石の姿、道を論じて邦國活く。斯の人亦た何ぞ幸ひなる、公の鎮して歲月を踰ゆ」（冀國公の裴冕殿は國家の柱石、道理をわきまえて國は平和に治められる。ここ成都の人々は何と幸いなことか。貴殿が治めてもう一年餘りにもなるのだ）とある。この部分は、六頭山の山頂においてではなく、成都に到着後いよいよこの詩を裴冕に献上するとき書き足された部分と考えられる。杜甫が成都で裴冕に接觸を試みていた證據であろう。そして裴冕は、その氣になれば自分を頼ってきた杜甫をいかにようにもできるだけの實力を持っていた⁽³⁾。

杜甫は草堂の生活の中で落ち着きを取り戻す。成都の初めての年の春から夏にかけて作られた「卜居」0385、「堂成」0393、「蜀相」0394、「江村」0401などのよく知られた詩では、杜甫は草堂を取り巻く自然の中でゆったりくつろいでいる。それは半年前の秦州の詩で、周囲のすべてが無慈悲に尖って杜甫の神経を苛んでいたのとは餘りにも大きな變化である。こうして

杜甫は、かつて天子のお側近くに仕えたこともあるが、都を追われて流浪の詩人となり、今は成都の西の浣花溪の畔りに茅屋を結んで隱者となったという自畫像を、詩に描き始めるのである。これらの詩篇は「幸福なる不遇者」という魅力的な人物像を中國の文學史に付け加えることになった⁽⁴⁾。

裴冕は、間もなく中央官として長安に召し返された。しかし近隣の州の長官にはまだ詩友の高適いた。それに舊知の嚴武も成都府長官、兼西川節度使として赴任して来る。このうち嚴武は、杜甫の後半生を語る上でとりわけ重要な人物である。

嚴武（七二六～七六五）字は季鷹。杜甫は父親の宰相嚴挺之とも付き合いがあったらしく、また嚴武その人とは共に房瑄派に屬して政治的にも近い立場で、世代を跨いだ世交の關係にあった。二人が親密になるのは、七六二年に嚴武が成都に赴任してからである。杜甫はこの時、わざわざ郊外の草堂までこの成都の権力者を招いて接待もしている（「嚴中丞枉駕を枉げて過ぎらる」0524、また0550）。嚴武はその後、七六二年秋から七六四年春まで長安に召還される。この嚴武の不在を狙って徐知道が成都で反亂を起こしたため、杜甫は草堂にいた家族を梓州（四川省三臺縣）に呼び寄せ、梓州と閬州（四川省閬中市）の四川盆地の中央部を轉々とした。梓州の實力者で、東川節度使留後（留守役）の章彝は杜甫を大事にし、杜甫も彼の宴席に侍って詩を作ることもあった。ちなみにこの章彝は、やがて成都に戻っ

てきた嚴武の怒りに觸れて杖殺される運命にあった。

嚴武は、七六四年春に再度成都に來任した。杜甫は蜀を去って長江を下る計畫を立てていたが、嚴武の再來を知り、豫定を變えて成都の草堂に歸った。嚴武は杜甫を厚遇した。杜甫を自分の幕府に節度參謀として迎え入れ、また朝廷に働きかけて、杜甫のために中央官である檢校工部員外郎を手に入れてやった。

「檢校」とは一般に、その實務を持たずに中央官の肩書きを帯びることである。杜甫の場合も從來、節度參謀に添えられたたんなる形式的な肩書きと考えられてきたのだが、近年の陳尙君氏の研究によって、これが長安の朝廷において就任を豫定された實職である可能性が提起された。⁽⁵⁾ 杜甫が死に至るまで工部員外郎の身分に誇りと執着を示したことは、從來のたんなる肩書きで説では説明しにくく、この實職説には大きな説得力がある。杜甫は、嚴武が七六五年四月に成都で急逝した前後に、成都を去って長江を下る旅に出る。

⑥ 峡中期

しかし長江を三峽の入り口の雲安（重慶市雲陽縣）まで下ったところで持病の糖尿病が悪化したために半年餘りの時間を浪費し、その後もすぐ下流の夔州（重慶市奉節縣）で二年ばかりの病臥を餘儀なくされた。⁽⁶⁾ 朝廷で工部員外郎に就任する望みは、この間にほぼ絶たれたであろう。

夔州は長江の三峽にあり、東瀼水（草堂河）^{まつらうすい}がつくる小さな平地と山の斜面に人家がひしめく谷間の町だった。また長江の舟行を監視する江關が置かれる水運と軍事の要衝だった。四方の視界を山に遮られた閉塞した空間、長江を行き交う商船や軍艦の喧騒、この異様な世界が杜甫の病を養う土地となった。

夔州では、初め半年ばかりは西閣とよばれる白帝山の中腹の長江を見下ろすところに假住まいがほしい。その後、夔州府長官として赴任してきた柏茂琳の物心兩面の援助を得て、瀼西の地に自宅を兼ねた果樹園を手に入れて住まい、少し離れた東屯の稻田の經營を行うことで經濟的には安定した。杜甫はこの果樹園や稻田の收穫によって、次の旅のために資金を蓄えることになる。

外部との交渉が細くなるのと反比例するかのようには創作力は異様に高揚した。任官への絶望と暮る老衰の不安の中で文學は内省化し、自傳的な「壯遊」²⁰²⁵や、詩による故友の傳記集となった「八哀詩」²⁰²⁴～²⁰²⁵などの長篇の追想詩が立て續けに作られ。また彫琢された言辭を用いて記憶の中の長安と夔州の現在とを交錯させた七言律詩の連作「秋興八首」は、杜甫晩年の文學の頂點を作るものともなった。そして夔州も後半の瀼西の宅に落ち着いてからの時期には、前期の詩を支配する緊張感がほぐれて、平淡な表現の中に日常の滋味を詠み込んだ作風へと轉じてゆく。それは杜甫の田園詩と稱してもよいものである。

う。結果としてこの二年足らずの夔州期の詩作は實に四三〇首餘りに上り、それは杜甫の現存する作品約一四五〇首の三割強に當たっている。

㊦ 最後の漂泊期

五七歳の春に夔州を去り三峡を下って、杜甫は生涯最後の旅に登る。途中の江陵(湖北省荆州市)に半年餘り逗留したのは、長安に歸るべきか、それとも自分を迎え入れようとはしない長安の朝廷に背中を向けるべきかという最後の決断に時間を要したためである。

江陵は長江中流域の重鎮として、江陵府が置かれていた。長江の水運の中継地であるとともに、長安や洛陽にはここから陸路を取って北上する南北交通の樞軸に位置している。この江陵府の實力者は、江陵尹(長官)・荆南節度使を兼務する衛伯玉だった。杜甫は、この衛伯玉を通じて長安の朝廷と接觸しようとしたものと思われる。まだ工部員外郎就任の可能性が残っているかどうか、この時の杜甫の最大の懸案事だった。しかし衛伯玉は、杜甫のために特別に盡力したふうではなかった。杜甫は彷徨の果てに南へと向かい、その年の暮れに洞庭湖に臨む嶽陽樓に達した。名篇「岳陽樓に登る」¹¹³³はこの時の作である。それから洞庭湖を渡って、潭州(湖南省長沙市)に達し、そのまま舊知の韋之晉が刺史を務める南の衡州(湖南

杜甫とその時代(松原)

省衡陽市)に向かった。しかし韋之晉は入れ違いに潭州刺史に轉任しており、ほどなく潭州で亡くなった。杜甫は潭州に引き返して、七六九年の夏から翌年春まで半年餘りを過ごす。かつて玄宗に寵愛された歌手の李龜年に会い「江南にて李龜年に逢う」¹¹³⁴を作ったのはこの頃であろう。

岐王宅裏尋常見 岐王の宅裏尋常に見

崔九堂前幾度聞 崔九の堂前幾度か聞く

正是江南好風景 正是是れ江南の好風景

落花時節又逢君 落花の時節又た君に逢う

——思い返せば、洛陽の岐王さまのお屋敷内でもお見かけし、崔滌さまの堂の前で歌聲を何度もお聞きしたものです。今まさにすばらしい風と光に満ちるこの江南の潭州で、花の散り落ちる時節にあなたに再會できました。青春の日々の輝くような想い出と、老殘の身を江南の春景色にさらす今と。この二つの間に、杜甫の人生が詰まっている。切り詰められた言葉に、これほどに深い感慨が満たされることもあった。

潭州で思いがけず臧玠が反亂を起こしたため、杜甫は潭州を去って、衡州のさらに南の郴州に郴州刺史代行の崔偉を頼ろうとする。しかし郴州の手前で洪水に遭って船が進まず食料を缺いて、耒陽縣令の攝氏より酒肉を送られ難を脱することもあっ

た。杜甫が酒肉に當たつて死んだという古い傳説はこれによつてゐる。臧玠の亂が收まつたのを聞いて郴州には行かず、潭州に戻つた。しかし江南の地には、杜甫が頼るべき友はもういなかった。晩秋には、漢陽（湖北省武漢市）から襄陽（湖北省襄陽市）に行こう、さらには長安にも歸ろうと思ひ立って潭州を出發した。通説では、この冬、潭州と岳州の間で客死している。

この死に至る悲惨な放浪の中にあつても、杜甫は新しい詩境を開拓した。夔州期の粘着的な作風を改めて、沈痛な悲しみを自在で輕やかな文辭に寄せることに成功したのである。杜甫こそは生涯を通じて自己を乗り越えて、新しい文學を作り續けることができた希有の詩人だった。

杜甫の生前の評價は、同時代の王維や李白に及ばなかつた。しかし半世紀後の韓愈・元稹・白居易らがこぞつて顯彰し、さらに北宋の後期に至ると王安石・蘇軾・黃庭堅らによつて古今第一の詩人としての評價を確立して今日に至る。後世になると、目前の歴史を詩によつて克明に綴つたために詩史と評され、李白の詩仙に對しては、杜甫は詩人に與えられる最高の稱號である詩聖をもつて稱された。

(二) 杜甫の時代

杜甫が生まれて生きた盛唐という時期は、詩が盛んな唐代の中でもとりわけ詩が盛んな時期と目されてきた。そもそも宋代

以降に定着する「盛唐」という呼び方が、國力ではなく、李白や杜甫らによる詩の隆盛に注目して名付けられたものである。だから「杜甫は盛唐期に活躍した詩人」という説明は、説明とより同語反復にすぎない。そこで問われるべきは、なぜこの時期に李白や杜甫のような鮮やかな個性を持った詩人が輩出したかである。この時期の詩人といえば、王維も、孟浩然も、岑參も、高適もいる。たんに詩人や詩篇の數だけを見れば、これに續く中唐（七六五〜八三五）や晩唐（八三六〜九〇七）が多いのだが、個性を持つ詩人の密度でいえば盛唐が抜きん出ている。それに彼らの詩には、他のどの時代の詩にもまして華やきがある。

盛唐は、詩を作ることに特別に榮譽が與えられた時代だった。詩的能力は、その人の能力全般の指標であり、政治的手腕も詩的能力によつて推し量れると社會が認識していた。杜甫もその時代の詩人たちも、このことを信じて疑わなかつた。

中國では、詩が擔うべき責任が大きかつたことはよく知られている。曹操の長子で三國の魏の文帝曹丕は、文學の地位について重要な發言を残している。「文章は經國の大業にして不朽の盛事なり」（「典論」の「文を論ず」）。文學とはかりそめのものではない、國家を治めるための大事業であり、不朽の偉業でなければならぬ。この發言が廣く深く浸透する中で、文學に詩にはたんなる風流以上のものが要請され、國家の選良たちは

「經國」の抱負を抱く限りで、詩を作ることから逃れられなくなった。また政治権力の側も、それがいかに建前に過ぎなかったにせよ、詩人を丁重に扱わざるを得なくなった。傳統中國において文學が格別の地位を占めることになる發端にこの曹丕の言葉があったことは、いくら強調しても足りないものがある。

曹丕がいうところの「文章」とは、狹義の文學（詩賦）を中心に、廣く彫琢された言語表現一般を意味するものであり、そこには上奏文などの行政文書も含まれていた。日本でもよく知られた『文選』は漢以前から魏晉南朝にかけての詞華集であるが、この中には詩賦ばかりではなく、李斯の「書を始皇帝に上る」や諸葛亮の「出師の表」などの行政文書も収録されていて、これが「文章」の範圍を示す傳統的な指標となっている。要するに曹丕の「文章」に今の譯語を與えたとすれば「文學」であり、言葉に工夫を凝らすことで、傳えるものに頼らずに、言葉そのものが輝き始めるようなものの總稱なのである。この「文章」の中心に言葉の彫琢を身上とした詩賦があったことは理の當然であり、しかも曹丕もまた彼の周りに集まった建安の七子らがこぞって詩賦の達人であった事實からも推して知るべしである。

しかし「文章」の中から詩（詩賦）だけを取り出して文學と見るようでは、かえって傳統中國における詩の地位を理解する妨げともなりかねない。むしろ注意すべきは、詩は多様な「文

杜甫とその時代（松原）

章」の一角に位置を占めることで、「經國の大業にして不朽の盛事」なる「文章」に要請される責任を擔い續けたというもう一つの重い事實であらう。

* * * * *

詩が國家の選良たちの餘技ではなく、その本質に關わるとされたとき、詩そのものの性格も決まってくる。詩は、個人の生活の些事を語るだけでは物足りず、天下國家をも呑み込むような氣宇を備えなければならなくなった。日本にも「ますらおぶり」という語がある。しかしわが「ますらおぶり」が、初期萬葉時代という民族がその歴史の初めに一回的に經驗した文學的事件だったのに對して、中國の詩に期待された氣宇の大きさは、文學に對する理念的要請に基づく點で違うのである。

もっとも中國の文學に要請されたその「氣宇」は、いつの時代も同じように大きかったわけでもなかった。そもそも曹丕が「文章は經國の大業にして不朽の盛事なり」と唱えた三國時代の骨太の文學（建安の風骨）にしてからが、銳鋒の切れ味を見せることはあっても、大海がうねるようなゆたかさは無縁のものだった。さらにその後、南朝時代の貴族文學になると、洗練された修辭の美しさと引き替えに小さな世界に引きこもってしまった。文學が、眞に巨大な氣宇を實現するのは、玄宗が登極した盛唐の時代になってからのことである。

その盛唐期の詩の平均値は誇大さにある。その限りでは、對

照的な個性といわれる李白も杜甫も同断だった。彼らはそもそも、詩を作るときに謙虚さということを知らなかった。

李白の「白髮三千丈、愁いに縁りて箇くの似く長し」(「秋浦の歌」其の十五)などは誇張表現の代表とされるのだが、ここで大事なことは、このような誇大な表現が違和感なく受け入れられる雰囲気があったことである。廬山の瀑布を「飛流直下三千尺、疑うらくは是れ銀河の九天(天上)より落つるか」と(廬山の瀑布の水を望む二首)其二と描き、黄河の奔流を「君見ずや黄河の水の天上より來たり、奔流して海に到りて復た回らざるを」(將進酒)と高らかに歌ったとき、李白は、天空と地上が交わるような壯麗な光景をそのままに視ていたのである。

李白については、これ以上觸れないでおこう。杜甫が我が身一人も持て余す無力の分際だった時、高官に向かって「君を堯舜の上に致さん―天子さまを堯舜よりも立派にしてさし上げた」と0035という途方もない大法螺を吹いてみせたのも、杜甫が李白と同じ空気を吸っていたからである。野放圖な雰囲気がこの時代を蔽っていて、その雰囲気が李白や杜甫の文學を育んでいた。

* * * * *

そうした盛唐の雰囲気は、どこから來ているのか。よく言われるのは玄宗の時代に、唐の充實した國力が周邊諸國をなびか

せ、國內では「開元の治」と稱される極盛期を出現させる、このような當時の上昇気分が詩人たちに格別おらかな氣宇を與えた、これが盛唐期に詩が榮えた理由なのだ。――この説明は實にわかりやすく魅力的ではあるのだが、しかし十分ではない。太平と稱される時期は、長い中國の歴史ではこの盛唐に限らない。それに太平の時代が、天下國家を呑み込むような霸氣に満ちた文學を作るわけでもなく、往々にして個人の愉樂に埋没する文學を生んできたことを私たちは目にしているのだから。

この玄宗の時代が文學にとって特殊な時代であったのは、實に玄宗自身が、人々を焚き付けてその野心を煽り立てたためである。この結果、彼らはあたかも戰國時代の遊説家を氣取り、自作の詩文を引つ提げて貴族高官の間を闊歩し、皇帝に對して自分を賣り込みにかかったのである。その群れの中に杜甫は位置していた。

この風潮はたんなる漠然とした氣分ではなく、國家の制度の裏付けがあった。

唐代の科擧は、宋代以後の科擧が本番の筆記試験だけで合否を判定するのは異り、世上の評判も加味して選考する方式を採っていた。極端な場合には、前評判の高さのゆえに事前に及第が約束されることもあったらしい。有名な例が、晩唐の詩人杜牧の場合である。杜牧は「阿房宮の賦」の作者として評判を取っていた。大學博士の吳武陵は、主席試験官となる崔郾に對

してこの「阿房宮の賦」を示しながら首席合格させるべきだと提案した。崔郾の答えて曰く「首席はもう決まっている、それに杜牧は羽目を外しやうい人物とも聞いている、ただ貴殿が是非とも五等は欲しいと仰るのであれば、お考えを尊重したい」。杜牧の科擧及第はこうして事前に決まった。これは元の辛文房の『唐才子傳』巻六に載せる逸話である。

このため受験者は、事前に自作の詩文を携え顯貴や名士を訪ねて回ることになる。科擧の試験は春にあり冬には願書の届け出となる。そこで秋までに蓄えた作品集を有力者に獻呈するのが習わしになっていた。これを行卷（巻を行む）という。唐代に詩が榮えた理由として、科擧の難關である進士科で詩賦の制作を課したことが擧げられるが、むしろこの行卷という慣習のほうが大きな意味を持った。もっともこの行卷は唐代全般に關わることなので、今は話を盛唐に絞ることにしよう。

* * * * *

任官のための資格試験である科擧には、常科と制科（制擧）の二つがあった。普通に科擧といえ、毎年春に實施される常科を指す。これに對して制科とは、「非常の材」つまり非凡な人材を求めて皇帝が臨時に實施する試験である。この制科は、皇帝みずからが試験官となる「皇帝親試」である。皇帝直々のお墨付きを得られるこの制科の及第は、格別に名譽あるものとされた。常科の及第が任官資格を與えるだけなのとは異なっ

杜甫とその時代（松原）

制科の及第ではただちに任官となる道も開かれた。また常科に及第してすでに官職にある者が、さらなる榮達を期して制科を受験することもあった。

このほかに獻賦という方途もあった。賦とは、漢以來の傳統を持つ韻文の名であり、傳統的には詩よりも格上の様式だった。司馬相如は、前漢の武帝に「子虛の賦」の作者として召し出され、その後「大人の賦」を獻じて武帝の信任を確かなものにした。このことを發端として、皇帝に賦を獻じて自己の才知や見識を披露するのが一つの型として定着していた。唐代はこれを人材拔擢の方法として制度化したのである。宮門の前に延恩匾（中書試）を受けさせ、成績に應じて任官、または任官の資格を授けた。この獻賦の方法は、一度に大勢の受験生を集める公開試験ではないためにあまり注目されることがなかった。しかし杜甫について見れば、近年の研究で、この獻賦によって任官の資格を手に入れたことが明らかになった。⁽⁸⁾杜甫の獻賦は、七五〇年の「鵬の賦」、七五一年の「三大禮の賦」、七五四年の「西嶽に封ずる賦」の三回である。このうち二回目の「三大禮の賦」が幸運にも玄宗の目にとまり、翌年、中書堂における高官の面接試験において合格とされ、任官資格である「出身」を與えられたのである。

中國詩文論叢 第二十四集

獻賦の翌年の作に「集賢院崔（國輔）于（休烈）二學士に留贈り奉る」（集賢院學士の崔國輔、于休烈に贈り奉る）0059があり、その自注に「甫、三大禮賦を獻じて出身す。二公嘗て謬まりて稱え述ぶ」とある。崔國輔と于休烈はこの時の試験官であり、二人の合格判定があつて杜甫には「出身」という任官資格を與えられたという意味である。集賢院は中書省に屬する皇帝を輔佐する頭腦集團であり、その成員を集賢院學士と稱した。杜甫にすれば、この體驗こそ無上の榮光だった。後年「莫相疑行」0063の中段でその時の有り様を、大切な寶物を取り出すかのように思い出している。

憶獻三賦蓬萊宮 憶う三賦を獻ず蓬萊宮
自怪一日聲烜赫 自ら怪む一日にして聲の烜赫たりしを
集賢學士如堵牆 集賢の學士堵牆の如く
觀我落筆中書堂 我れの筆を中書堂に落とすを觀る
往時文采動人主 往時は文采人主を動かすも
此日飢寒趨路旁 此の日飢寒路旁を趨る

——三大禮賦を宮中に献上したとき、自分でも不思議なほどに一日にして名聲が鳴り響いたのを思い出すのだ。集賢院の學士たちは壁のように私を取り圍み、中書堂で私が筆を下ろすのを固唾をのんで見守っていた。往時は文才がかくも天子を驚かせ

たものだが、今は飢えと寒さでおろおろと道の邊を走り回る。

* * * * *

常科が毎年決まった時期に實施されるのとは異なり、制科や獻賦は皇帝が臨時に「非常の材」を求めた制度だった。この制科と獻賦の二つは、士人たちに計り知れないほどの衝撃をもたらした。皇帝が國士を招く制度として目に映つたのである。こうして士人たちはあたかも戰國の世の渡り歩く遊説家を氣取つて大言壯語し、皇帝に向かつて自分を賣り込みにかかった。そのような風情を見事に體現しているのが、やがては杜甫の友となる若き日の高適だった。「韋參軍に別る」は、仕官の道を求めて二十歳で上京した時のことを思い出す。詩の前半。

二十解書劍 二十書劍を解し
西遊長安城 西のかた遊ぶ長安城
舉頭望君門 頭を擧げて君門を望み
屈指取公卿 指を屈して公卿を取らんとす
國風冲融邁三五 國風冲融として三五を邁ぎ
朝廷歡樂彌寰宇 朝廷の歡樂寰宇に彌る
白璧皆言賜近臣 白璧は皆な言に近臣に賜り
布衣不得干明主 布衣は明主に干むるを得ず
歸來洛陽無負郭 歸り來たるも洛陽に負郭無く
東過梁宋非吾土 東のかた梁宋に過るも吾土に非ず

兔苑爲農歲不登 兔苑に農と爲るも歲登らず

雁池垂釣心長苦 雁池に釣を垂るるも心長に苦しむ

——二十歳で文武の道を心得て、西のかた長安の都に上ったものだ。皇居の高きを仰ぎ見ながら、公卿の地位も立ろに得られるものと勇み立った。國びとたちの歌はおおらかで傳説の三皇五帝の御代を凌ぎ、朝廷に湧き上がる歡娛の聲は天下に満ちあふれた。しかし貴重な白璧の褒美は近臣に下賜されるだけで、自分のごとき無官の布衣には天子に近づく機會もなかった。かくてすごとと歸ってきて、洛陽に良い田畑があるわけもなく、東のかた梁宋（河南省東部）を訪ねてみても身を落ち着ける土地ではなかった。前漢の梁王が天下の文士を招いたという兔苑の故地で百姓のまねをしてみても收穫は乏しく、兔苑の雁池で釣り糸を垂れたところで心は怏々として楽しまなかった。

（後略）

仕官の道を閉ざされて、高適は失意の中にいる。しかし注目すべきは、そうした自分の挫折を戰國時代の遊説家蘇秦に重ね合わせていることであろう。高適は國君に目をかけられ國士として拔擢されたいと願った。「明主に干む」とあるので、高適の意圖が、皇帝を相手に自分を賣り込むことにあったことがわかる。高適の上京は常科の受験ではなく、皇帝主催の制科の受験、もしくは皇帝への獻賦を目的としていたはずである。

杜甫とその時代（松原）

希望は無残に打ち碎かれたが、この挫折を経ることで高適の國士としての自覺はかえって深められる。戰國時代の蘇秦は、西の強國秦に對抗するため燕・齊・趙・韓・魏・楚の六國をまとめるべく遊説して、ついに合従策を實現し、六國に共通の宰相となって故郷の洛陽に錦を飾った。そのときの言葉が有名である。曰く「もし自分に洛陽の城郭にほど近い恵まれた條件の田畑があったならば、それに満足して奮起することもなく、結果として今の自分もなかったのだ」。高適は己れの挫折を若き日の蘇秦の境遇に重ね合わせることで、奮起を心に誓う。事實としてあるのは、二十歳の青年が上京し仕官に失敗したというどこにでもある話である。しかしそれをどのように受け止めるのが文學なのであり、高適はここに見事に盛唐の文學を描き切っている。

李白にも似たような趣きの詩がある。「南陵にて童に別れて京に入る」は李白が四十歳、朝廷からお召がかかって南陵（山東省兗州市）の家族に別れを告げて長安に上るときの作である。制科實施の詔敕を知って李白は上京し、これを機に見出だされて翰林供奉としてお側に仕えることになった。詩の後半を掲げよう。

高歌取醉欲自慰 高歌し酔いを取りて自ら慰めんと欲す
起舞落日爭光輝 起舞すれば落日と光輝を争う

遊説萬乗苦不早 萬乗に遊説す早からざるに苦しむ
著鞭跨馬涉遠道 鞭を著け馬に跨りて遠道を涉る

會稽愚婦輕買臣 會稽の愚婦は買臣を輕んず

余亦辭家西入秦 余れも亦た家を辭して西のかた秦に入る

仰天大笑出門去 天を仰ぎ大笑して門を出でて去らん

我輩豈是蓬蒿人 我輩豈に是れ蓬蒿の人ならん

——酔って大聲で歌って自分のこれまでの憤懣を慰めよう。立ち上がって舞い、落日のまぶしい光と輝きを争うのだ。萬乗の天子に遊説するのがいささか遅すぎたようだ。いまこそ意氣揚々と鞭を當て馬に跨がって遠い道を進んでいこう。會稽の愚婦はいつまでも出世できぬ朱買臣を輕んじたものだが、いま自分は朱買臣のように君に召されて、家を後に西のかた長安の都に上る。天を仰ぎ大聲で笑って門を出るのだ。この私がどうして草深き田舎で一生を終える人間であらうか。

李白は皇帝の發した制科開催の通達を知って、我こそはと思いついて都へと出立した。ここでも興味深いのは「萬乗に遊説す」という言い回しである。「萬乗」とは戰車一萬乘(輛)を動員できる天子を意味した戰國時代の用語である。李白はその「萬乗」に「遊説」すると、この二語を組み合わせることで戰國の世に自説を賣り込むべく遊説した國士を演じてみせるのである。制科は皇帝が主催し、試験官は皇帝自身である。じかに

皇帝と向かい合うというこの制科の仕組みが、いかに士人たちの精神を鼓舞したかが察せられる。

玄宗は才を愛した。制科という皇帝親試の制度は、この玄宗という大振りの華やかな個性を後盾とすることで、その持つ衝撃力を最大に發揮したのである。やがて玄宗が退場すると、科擧制度の成熟とともに例外措置に當たる制科の役割は過去のものとなり、太和二年(八二八)を最後に行われなくなる。また制科を補充して「非常の才」を拔擢する獻賦の制度も、歴史的な役割を終えようとしていた。そこには毎年の常科を目指して勤勉な秀才たちがしのぎを削る姿が見えるばかりで、もはや高適や李白が立ち現れて皇帝の前で大見得を切るような晴れの舞臺はなくなり、盛唐の文學も姿を消すのである。

(三) 杜甫の位置

杜甫は、高適や李白と共にこの盛唐の空氣を呼吸した詩人である。しかし杜甫には、高適とも李白とも違う立場があった。彼ら二人の「國士」は、自己の詩才をどれほど自負しているも、最後には政治の手腕で評價されることを念願していた。高適には確かに政治的手腕があり、玄宗の後を繼いだ肅宗の廷臣として榮達を果たすことができた。しかし李白に至っては、詩才を除けばほとんど見るべき能力がなかったにもかかわらず、政治的功名の前では、詩は餘技に過ぎなかった。李白の「古風

五十九首」其の九が面白い。

齊有倜儻生

齊に倜儻てきとうの生おとし有あり

魯連特高妙

魯連てきとう特に高妙

明月出海底

明月海底より出で

一朝開光曜

一朝光曜を開くあり

却秦振英聲

秦を却けて英聲を振り

後世仰末照

後世末照を仰ぐ

意輕千金贈

意に千金の贈りものを輕んじ

顧向平原笑

顧て平原に向かいて笑う

吾亦澹蕩人

吾れも亦た澹蕩の人

拂衣可同調

衣を拂いて調を同じくす可し

——戰國の齊には豪傑の男たちがいたが、中でも魯仲連が頭抜けていた。明月が海から昇って、にわか光輝を放つようだ。

彼は趙のために強國の秦を退けて名聲を馳せ、後世の人々は彼の榮光のあとを慕い續ける。千金の褒美も受け取らず、趙の平原君にはほえみかけると何處へともなく姿を消した。自分も欲得にとらわれぬ身、魯仲連のように衣の塵をはらって俗世とおさらばしたいものだ。

李白は、このような政治の舞臺であらばれな活躍を夢見たのであるが、そこには詩が全く顔を出していない。李白は詩の

杜甫とその時代（松原）

力によって玄宗に近づき政治の舞臺に上ろうとして、それを途中まで實現したのだが、詩はその目的を遂げるための方便に過ぎなかった。無論こう言ったところで、李白が自分の詩を粗末にしたと言いたいわけでもなく、我々が李白の詩を貶めるつもりもない。李白という人は、榮達を成し遂げた末には、魯仲連が褒美も受け取らずに姿をくらませたように、詩も何もかも棄てて飄然と姿を消し去る處世の中に己れ的美學を求めていた。ただ李白は榮達することがなかったので、もっぱら詩人として名を留めることに努めたのである。

政治的達成から見れば高適と李白の最後はまるで違うが、二人をひっくるめてこれこそが盛唐の空氣が作り出した文學的風土だった。それがいかに逆説的に聞こえたところで、盛唐の文學はその風土の中で「文學などはものともしない大きな氣宇」を手に入れたのである。

* * * * *

杜甫も同じ盛唐の空氣を呼吸していたのだが、しかし杜甫の願った政治的功名は文學とどこまでも連携して、政治的功名は文學の力によって成し遂げられると信じていた點で、盛唐の詩人の中で独自の位置を占めている。

杜甫の思いが高適や李白とは異なるのは、文學の傳統を背負うべき家柄に生まれたことと關係している。杜甫の祖父の杜審言は、則天武后に仕えて近體詩の成立に貢献した宮廷詩人であ

り、杜甫はこのことを終生の誇りとし、詩業をもって家業とみなした。死を數年後に控えた五五歳のときに次男宗武の誕生日を祝って作った「宗武の生日」(0908)の中で、「詩は是れ吾が家の事、人は傳う世上の情」(詩はわが杜家の家業であり、人々はその杜家の評判を言い傳えている)と述べる。杜甫は、杜審言の詩業を繼承することを杜家に生まれた者の責務と考えて、次代を擔う宗武に教え訓したのである。

また杜甫が若き日に親炙した李邕は、漢魏から南朝にかけての貴族文學の詞華集である『文選』に注を付けた李善の子であり、また彼自身も李善注の完成のために補筆したと目される文學の大家だった。また李邕は頼まれて多くの墓誌を制作した能書家でもあり、貴族的教養を體現した文人だった。その李邕はやがて、政治を吏務(實務)として取り仕切ろうとした宰相李林甫によって處刑される。文治から吏治への時代の流れの中で李邕が姿を消したのは象徴的な事件といえるだろう。杜甫は、杜審言を祖父に持ち、李邕を師とすることで、文學が宮廷政治を美しく飾っていた時代の息吹を肌感じて育ったのである。

* * * * *

儒教は日本ではもっぱら精神論であるが、中國ではしばしば禮教と言ひ換えられた。朝廷やこれを模した地方の官署で政治が嚴かに執り行われる。その整然とした進行の中に傳統的知識人たちは天下の秩序の縮圖を見たのであり、それこそが儒教の

本質と見たのである。その嚴肅な秩序を演出するのが「禮樂」だった。禮樂とは、儀禮と、儀禮を莊嚴する奏樂である。後世になると「樂」はその重要性を文章(文學)に譲ることになる。文章とは、美しく莊嚴な言葉で飾られた皇帝の詔敕や臣下の上奏文であり、また皇帝が賜る宴席で飾られた皇帝の詔敕や臣下の上辭賦や詩歌のことである。『陳書』卷三四(列傳「文學」)に、陳の後主(二代皇帝)の文章溺愛を描いた興味深い一文がある。

後主業を嗣ぎ、雅に文詞を尙び、傍く學藝を求むれば、煥乎として俱に集まる。臣下の疏を表し及び賦頌を獻上する者ある毎に、躬自ら省覽し、其の辭の工なる有れば、則ち神筆もて賞で激し、其れに爵位を加う。是を以て、搢紳の徒、咸な自ら勵むを知れり。

——南朝最後の陳の後主(二代皇帝)が皇位を繼ぐと、詩文を好み、學藝を重んじて、文人たちを周圍に集めた。臣下が疏を上り賦頌を獻するたびに、帝みずからご覽になって、巧みな表現があれば筆を執って贊辭を記し、作者には爵位を加えた。このため文官たちはこぞって詩文の技に磨きをかけた。

ここで注目すべきは、「賦頌」といった文學的作品ばかりか、「疏」(上奏文)のような政治の實用文書までもが文學として玩賞されていた事實である。つまり朝廷で披露される文辭は、そ

の内容の如何にかかわらず、すべてが朝廷の權威を美しく潤色するための文學だった。しかもその文學評價の元緒を、陳の後主みずから買って出していた。陳の後主といえ、文弱の天子として亡國の責めを歸せられる人物である。しかしここで繰り廣げられた朝廷の模様は、後主の獨占物だったわけではなく、程度の差はあれ中國の歴代王朝に共通していた。貴族の時代と目される魏晉南朝から唐代前期にかけてこの傾向は著しく、近體詩が成熟へと向かう則天武后から中宗にかけての時期は、その一つの頂點に当たっていた。杜甫が生を稟けたのはまさしくその時代である。

杜甫の文學は、政治の潤色を事とするような竝大抵の宮廷文學とは對蹠的であったが、それでも文學が政治と手を取り合つて太平の秩序を現出する姿を理想としたのは、その時代に生を稟けたからである。杜甫が玄宗の開元の治を支えた文人宰相の張説や張九齡を敬慕し、安史の亂のさなかに玄宗の宰相となつた房琯を失脚の後まで支持したのは、彼らがこの理想を共にする文儒だったからである。杜甫は、玄宗の「開元の治」の中に權力と文學が美しく寄り添う理想の姿を認めた。職能的良吏によつて効率よく行われる政治よりも、傳統文化の教養に據つて立つ文儒たちが朝廷を嚴かに飾る政治を求めたという點で、杜甫は貴族文化の殘照を背中に浴びて立つ詩人であった。過去の神話的世界の中に新しい時代の理想を託するような觀念的な

杜甫とその時代（松原）

「復古主義者」などではなく、自分がじかに肌に感じた近い過去の歴史の中に理想の影を求める正真正銘の保守的詩人だった。この點、李白や高適が背負うべき過去を持たなかったのと立ち位置が異なっていたのである。

（四）杜甫の文學

杜甫が過去に面を向ける詩人であるとは、唐の前期までをおつた貴族の時代の流儀を尊重するという意味である。杜甫が名門の出身者に敬意を表し、没落した貴族に同情を寄せ、その一方で安祿山の亂後ににわかには拾頭した新興層を無知な強欲者と侮蔑したのは、一時の感情に驅られたためではない。「秋興八首」其の四^⑧に「王侯の第宅は皆な新主、文武の衣冠は昔時に異なり」（王侯の屋敷はどれも新しい持ち主となり、文武の高官たちは昔と入れ替わった）と嘆じ、「錦樹行」¹²⁵⁸に「五陵の豪貴は反て顛倒、郷里の小兒は狐白裘」（お屋敷町の貴族たちは落ちぶれ、田舎の小童が白狐の裘を着る有り様だ）と苦々しく舌打ちしたのは、杜甫にすれば當たり前のことだった。^⑨

① 近體詩

近體詩は貴族的美文の精粹である。精巧な對句や華麗な詩語の活用は、貴族支配が確立する西晉（二五六～三一六）の頃にはもう目立ち始め、五世紀末の南齊になると、漢字一字ごとに

聲調（平聲・上聲・去聲・入聲）が備わることが知られて、沈約によって四聲八病説という韻律論が提唱される。さらに唐代になると、四聲の煩瑣な分類が、平聲と仄聲（上聲・去聲・入聲）の二元對立に集約されて近體詩の韻律は成熟することになる。この最後の段階で大きな役割を果たしたのが杜審言だった。杜甫がこの祖父を持つことを一族の誇りとしたとき、近體詩を擔う詩人となるのは豫定のこととなった。なお忘れてならないのは、近體詩の中で最も遅れて成熟した詩型が七言律詩であり、その實質的な完成者が杜甫だったことである。この事實は、杜甫が貴族文學の最終局面に位置して、そこに有終の美を飾る詩人となったことを意味している。

近體詩を代表するのは律詩である。絶句に對句は不要であるが、律詩では中間に二組の對句を用いるという條件がつく。對句は中國文學の修辭の核心であり、平仄や押韻などの韻律規則は、對句の効果を際立てるための羽翼である。杜甫は、對句を中央に据えてそれを美しい韻律で包み込むこの律詩の詩型をとりわけ愛好した。杜甫の代表作の「國破れて山河あり」の「春望」、「昔聞く洞庭の水」の「岳陽樓に登る」は五言律詩、晩年の文學の一つの到達點とされる「秋興八首」は七言律詩という具合である。

後世になれば、律詩は數ある詩型の一つである。詩型は言葉を盛るたんなる器となり、それ以上の思想的な意味を持つこと

はなくなった。しかし盛唐の時期に律詩に愛着を示すことは、一つの文學的主張であり、自分が過去に根を持つ貴族文化の繼承者であることを表明する行爲だった。この貴族文化とは、朝廷においては政治と文學が渾然と一體のままにある状態のことであり、一個の人間の中で政治的能力と文化的修養が一続きであることが尊重される精神風土のことである。杜甫はこの貴族文化を繋ぎ止めようとした。

ちなみに杜甫の好敵手の李白の場合はどうだったのか。李白は、名作のほとんどが絶句と古詩に集中して、律詩は得手とするところではない。そればかりか貴族の修辭主義を拒否して「建安より來かた、綺麗にして珍とするに足らず」（魏の建安時代以降の貴族文學は、美麗字句を綴るばかりで價值はない。「古風」其の一）と宣言するほどであった。盛唐という玄宗の時代は貴族の文化が盛りを過ぎようとする段階にあり、李白のような貴族文化を否定する主張の方が、時人の耳目には潑刺と響いたに違いないのである。

しかし杜甫が過去に面を向けた詩人であったにもかかわらず、杜甫の文學は、同時代の誰にもまして新しいものとなり、次の時代の文學を先取りするものとなった。これは杜甫が文學というものについて、機能主義、分業主義のさげけた見方をとらなかつたためである。文學は、文學のためにあるのではなく、特定の目的のために奉仕するものでもなく、人間の世界のすべて

に關與すべき総合的な營爲と捉えていたことと恐らくは關係している。その見方の雛型は、朝廷で繰り廣げられる文學が政治と交響する姿であり、さらに遡れば儒家の禮樂の思想にまで行き着くものであろう。ただ杜甫は、文學を貴族たちが繰り廣げる宮廷文學の狭い世界に閉じ込めなかった。天子の政治が及ぶ天下のすべてが文學の相手とする世界であると捉えることで、杜甫の文學は、廣大な表現空間を手に入れることになる。中國文學の歴史において禮樂的文學觀が極限まで至り着いた姿を、杜甫の文學の中に見ることができよう。

○ 鬼神を泣かしむ

すぐれた表現は人の心を揺さぶるという言い回しがある。ただ唐詩でこの言い回しを他者の贊辭ではなく、表現者である自己に向けて用いることは滅多になかった。その中の稀に見る例外が「江上水の海の如き勢いなるに値い聊か短述す」061の冒頭に「人と爲り性僻にして佳句に耽り、語の人を驚かさずんば死すとも休まず」と杜甫が述べるものである。

生來偏屈で佳い句を作ることに夢中になり、言葉が人を驚かさなければ死んでも死にきれなかった。——興味深いのは、杜甫が自分の苦吟癖をあえて標榜して隠そうとしなかったことである。これは早熟の天才を價值とする貴族の時代の好尚に背を向けた、杜甫一流の自己主張だった。ちなみに李白の態度は

杜甫とその時代（松原）

正反對である。李白は、杜甫に比べれば苦吟型の詩人ではなかったが、それでもいつも樂に詩を書いていたわけでもなからう。しかし李白は筆の神速を誇示した。杜甫は「李白は一斗詩百篇」(李白は一升酒を飲みながら詩を百篇作る「飲中八仙歌」086)と贊嘆したが、それが自他共に許す李白の詩の作り方だったのである。

ともあれ杜甫は、詩に斬新な意匠を凝らそうと苦心した。その時の杜甫の目標は、人に感動を與えることを超えて、天地の神靈に働きかけ、造物者を驚かすことにあった。「李十二白に寄す二十韻」0348に、

昔年有狂客 昔年狂客有り

號爾謫仙人 爾を謫仙人と號す

筆落驚風雨 筆落つれば風雨を驚かし

詩成泣鬼神 詩成れば鬼神を泣かしむ

——昔、四明の狂客と稱した賀知章があり、あなたを謫仙人(地上に謫された仙人)と呼んだ。詩文を書けば、その神速は風や雨を巻き起こし、詩ができあがれば、その詩は鬼神をも感泣させるほどであった。この鬼神とは、世界の背後にあってこれを支配する靈妙な存在という意味である。杜甫が李白の詩をこのように評價するとき、李白の詩がどうであるかではなく、最

中國詩文論叢 第三十四集

上級の詩の基準を杜甫がここに求めたことが重要な意味を持つ。そして恐らくこの「風雨を驚かし、鬼神を泣かしむ」とは、文學的な比喩などではなく、杜甫には肌身の質感としてあったはずである。

この「風雨を驚かし、鬼神を泣かしむ」は、杜甫においては詩に限らず、優れた藝術が共にすべき極致とされた。次の「奉先の劉少府の新たに圖ける山水障の歌」(1130)、つまり奉先縣(舊名は蒲州)の縣尉である劉殿が新たに描いた山水障壁畫を見て作った歌の中段を掲げる。

反思前夜風雨急 反て思う前夜風雨の急なりしを
 乃是蒲城鬼神入 乃ち是れ蒲城に鬼神入る
 元氣淋漓障猶濕 元氣淋漓として障猶お濕い
 眞宰上訴天應泣 眞宰に上訴して天應に泣くべし

——思い返せば君が繪を描いた昨日の夜に風雨が激しく募ったのは、きっと鬼神が蒲城(奉先)の町に入り込んだからだ。君の繪は天地の精氣に充ち満ちているので障壁の繪の具はいつまでも乾わこうとしない。これもきっと天地の主宰者に話が傳わって、天が涙を雨のように降らせたためなのだ。

杜甫はこのような言い回しを、自分自身に用いたことがある。「秋興八首」其の八(1032)の後半を掲げよう。過ぎ去った己れの

時間を描いて、これ以上に美しい詩を杜甫の詩集に見付けることはできない。

佳人拾翠春相問 佳人翠を拾いて春に相い問い
 仙侶同舟晚更移 仙侶舟を同じくして晩に更に移る
 綵筆昔曾干氣象 綵筆昔し曾て氣象を干すも
 白頭今望苦低垂 白頭今望めば低く垂るるに苦しむ

——春には美しい女性が春の野遊びに出て、飾りにする翡翠の羽を互いに贈りあい、仙人と見まごう貴人あてびとと舟を乗り合わせて、日が暮れても舟を移して歸るのを忘れていた。私の彩り鮮やかな筆はむかし森羅の嚴かな氣配を凌ぐほどの詩を作り出したものだが、今となって長安の方を眺めやると、悲しさのあまり白髪頭を思わずうなだれるのだ。

この詩は杜甫が四三歳、終南山から流れ出す清水を満たした漢陂湖に舟遊びしたときのことを思い出す(参照:「漢陂行」(1130))。舟を共にした「仙侶」とはこのとき同遊した詩人の岑參である。「氣象」とは天地の間を填める萬象のこと。これを終南山の姿を水面に浸した漢陂湖の光景と解釋すれば、杜甫の詩は、漢陂湖の光景と互いに美しさを張り合うという意味になる。またこの句が、その三年前に「三大禮の賦」を朝廷に献上し、それが玄宗の歡覽にかなったという杜甫の生涯で最もとき

めいた場面を思い出しているとすれば、杜甫の「綵筆」は、天子の心を搖さぶり、天地の萬象を搖り動かしたという意味になるだろう（參照「莫相疑行」0823）。ともあれ詩は、それが極致に至った刹那に天地の神靈と感應するという不可思議な感覺を、杜甫は忘れることができなかった。詩は天地の神靈と感應し、造物者に働きかける。詩と造物者とは、靈妙なある一點において相交わり連続していると、杜甫は確信していた。

詩は、造物者の一翼を擔う。この感覺だけが一人歩きしたならば、杜甫は一種の神祕主義者で終っていただろう。しかし杜甫は詩を造物者と並ぶ根源的な創造のレベルに据えたことよって、詩にまつわる傳統の制約から自由になる手掛かりを掴んでいた。こうして杜甫は、詩の表現の地平を未曾有の領域まで押し廣げたのである。

③ 杜甫における傳統と創造

杜甫は、新しい詩人だったのか、それとも古い詩人だったのか。杜甫の次の時代の韓愈や白居易らは杜甫を顯彰し、さらに北宋に至って王安石や蘇軾、黃庭堅によって杜甫を中國第一の詩人とする評價が確立する。しかもその評價が清朝まで揺るがなかったことを考えるならば、杜甫以後の千年餘りは、杜甫の文學が先取りした枠組みの中で展開したと言えなくもない。杜甫が新しい時代を切り拓いた詩人だったことは歴史的な事實で

ある。

しかしこのことは、杜甫が傳統を重んずる詩人であることを否定するものではない。すでに述べたように、杜甫の出発点には祖父杜審言の宮廷文學があり、李邕から授けられた漢魏南朝の貴族文學の精華としての『文選』の教養があった。黃庭堅が杜甫の詩について「一字として來處無きは無し」、杜甫の詩は片言隻句すべて古典の中に來處があると主張したのは必ずしも誇張ではなかった（黃庭堅『山谷集』卷一九）。しかし杜甫は傳統を繼承してそれを未來に繋いだ、もしこのように片付けてしまったならば、杜甫が何を成し遂げたかをまるで言わないようなものである。杜甫は、傳統を構成するものをすべて咀嚼しなおした。こう言って足りなければ、杜甫は、文學の傳統のすべてを一度粒子のレベルまで磨り潰して、それをもう一度組みなおしたのである。杜甫は生の形ではなく、それとわからないところまで粉碎して詩の中に撒き散らした。そもそもすぐに來處がわかるものについて、黃庭堅は「一字として來處無きは無し」とあえて念を押す必要は無かったはずなのである。

問題となるのは、その粒度である。杜甫は古典を、意味單位の最小値まで分解した。言い換えれば、古典との脈絡が完全に失われる素粒子のレベルのその直前まで古典を粉碎した。ここで李白との比較をすることが大事になるだろう。李白は奔放不羈の詩人とみられるが、その主題の設定や語辭の用法において

思いのほか傳統の枠組に忠實であり、逸脱することがない。つまり李白は、大きな粒度で古典を繼承したのである。それは花崗岩の肌理が大きく、大粒の鑛物結晶によって構成されていることがはっきり見て取れるようなものである⁽¹⁰⁾。

ともあれ古典は、杜甫の手の中でいったん鑄つぶされ、眞新しく鍛え上げられた。杜甫の詩はその威力を縦横に駆使することで、途方もない爆發力を手に入れたのである。

④ 樂府——杜甫が作らなかつたもの——

杜甫が新しい何を付け加えたかを考える前に、杜甫は何を作らなかつたかを考えることが大事かもしれない。その人の個性は、爲したことでではなく、爲さなかつたことでわかることが多いものである。

杜甫は、閨怨詩を作らなかつた。閨怨詩とは、男の訪れを待つ女の思を描いた詩のことである。君王の寵愛を失つた宮女、夫を戰場に送り出した新妻、またいつ歸るか當てのない行商人を待つ疲れた妻が典型となるが、杜甫はそのような女性を描くことしなかつた。この點で、李白とは好對照である。

玉階怨

玉階生白露

夜久侵羅襪

玉階白露生

夜久侵羅襪

夜久侵羅襪

李白

却下水精簾 水精の簾を却下して
玲瓏望秋月 玲瓏秋月を望む

——御殿の玉の階にきらきらと光る露が結んで、夜も更けるとき絹の靴下を冷たく濡らします。水晶の簾をさっと下ろしてみれば、秋の月が、簾を透かしていっそう玲瓏と輝いて見えるのです。

「玉階」とは大理石の階段。場面が宮中の御殿であることが暗示される。ここでは君王の來訪を待ち侘びる女性の姿は、何も描かれていない。すべてが哀しいほどに明るく輝く情景の描寫に費やされて、その中心を埋める者の美しさを言外に浮かび上がらせている。失寵の宮女は古來手垢の付いた題材ではあるが、李白の手の中で瑞々しい姿で蘇っている。

こうした閨怨詩が、邊塞詩と結び付くことがある。邊塞詩は唐代の前期に流行した、西北の砂漠地帯を舞臺に遊牧民との戦いのために遠征した兵士を描く詩である。岑參のように實體驗を踏まえた詩も無いではないが、大部分は内地にいる詩人が、出來合いの型に則って想像力で作つたものである。次の李白の有名な詩は、閨怨と邊塞の題材が重ね合わされている。

子夜吳歌

長安一片月

子夜吳歌

長安一片の月

李白

萬戸擣衣聲 萬戸衣を擣つの聲
 秋風吹不盡 秋風吹いて盡きず
 總是玉關情 總是れ玉關の情
 何日平胡虜 何れの日か胡虜を平らげ
 良人罷遠征 良人遠征を罷めん

——長安の夜空に、ぼつんと浮かんでいる月。その月の光に照らされた町の家々からは、冬着を仕立てる擣衣の音が響き渡る。秋風は、いつまでも吹いて吹き止まず。その一つ一つが玉門關にいる夫を思い出させる。いったいいつになったら胡どもを平らげて、夫は遠征から歸ってくるのだろうか。

「總て是れ玉關の情」。遠方をも等しく照らす月、擣衣の響き、西北から吹き來たる秋風、これらすべてが玉門關の夫を思い出させるというのである。その玉門關とは、現在の新疆ウイグル自治區敦煌の西にあった古い關所の名稱。前漢の時から、中國の西の最果て、いわば國境守備の最前線としてのイメージを積み重ねてきた地名である。この詩などは、最上級の唐詩といってもよからう。李白は、こうした閨怨や邊塞といった既製の型を使いこなすのが巧みで、そこに今までに無かったような新鮮な表情を付け加えることができた。

ちなみに閨怨詩や邊塞詩は、樂府という様式で作られることが多い。樂府は、本來は民間の歌謠であり、やがて文人たちは

杜甫とその時代（松原）

そのメロディーに乗せて替え歌を作る要領で歌詞を作り始めた。文人たちが古い樂府を模擬したものは、嚴密には擬古樂府と稱する。樂府の特徴は、作者の状況を作品に持ち込まないことであり、いわば自分が上らない舞臺情景を演出することにある。

つまりこれはフィクションですよと前置きしてから作る詩なのである。樂府には一つのメロディー（樂府題）ごとに替え歌が作られた長い歴史があり、そこにはお定まりの氣分や言葉が積み上がって「型」ができている。だから凡庸な詩人が作ると、千篇一律の凡作となる。腕に覺えのある詩人であれば、あえて樂府を作って腕前のほどを披露しようとする。李白が作った「靜夜思」と「子夜吳歌」はこの樂府に屬しており、李白はこうした樂府の名手であった。一方、杜甫はこうした既成の型に従うことを頑ななまでに承知せず、だから擬古樂府を作ることもしなかった。これは杜甫の大きな特徴といつてよい。杜甫は眼目前の事實の中からしか、詩を作ることができなかったのである。ちなみに杜甫の詩で樂府と稱されることもある。「兵車行」「麗人行」は、擬古樂府ではなく、杜甫自身の状況をあえて詩に持ち込んだまるで新しい様式だった（「兵車行」と李白の擬古樂府「戰城南」との對比は次節に述べる）。

⑤ 政治批判詩

杜甫が詩の領域を擴張した方面は實に多岐にわたるが、政治

中國詩文論叢 第三十四集

批判詩について述べておこう。領土の擴張に血道を上げる皇帝を揶揄した「兵車行」や、安史の亂に際して長安防衛のために驅り出される農民の姿を描いた「三吏三別」は、杜甫以前の詩に例を見ないだけでなく、古典文學の範圍に踏み止まって可能な極限の達成となった。

こうして政治批判詩は杜甫の詩業のなかでも突出した領域となつてはいるが、ここではむしろ杜甫が如何にして新しい詩の地平を拓いたかを見るモデルケースとして考えてみたい。

従來、政治批判を内容とする詩は諷諭詩と呼ばれた。「諷諭」とは、中國の古代歌謠を集めた『詩經』についての漢代の解釋學で提唱された概念であり、爲政者に對する民衆の批判が暗喩によってそれとなく表明される手法のことをいう。「碩鼠」〔『詩經』魏風〕は、作物を食い荒らす碩おほきな鼠を恨んで樂土に逃れることを願うだ詩だが、これを苛斂誅求を事とする爲政者に對する諷諭と解釋するのがその例となる。下つて漢代以後の樂府と呼ばれる民間歌謠系の詩歌についても、樂府を『詩經』の再來と位置づけて、諷諭の手法が存在するものと見なされた。この結果、魏晉以降の文人が樂府を模擬した擬古樂府にも、諷諭の手法が持ち込まれることになる。政治批判を盛り込む最適の器は樂府だと理解された結果である。李白の「城南に戦う」という擬古樂府は、諷諭の手法による政治批判詩である。樂府による諷諭の典型でもあるので、全篇を掲げよう。

去年戰桑乾源	去年は戦う桑乾の源
今年戰蔥河道	今年は戦う蔥河の道
洗兵條支海上波	兵を洗う條支の海上の波
放馬天山雪中草	馬を放つ天山の雪中の草
萬里長征戰	萬里長征して戦い
三軍盡衰老	三軍盡く衰老す
匈奴以殺戮爲耕作	匈奴は殺戮を以て耕作と爲し
古來唯見白骨黃沙田	古來唯だ見る白骨と黃沙の田
秦家築城備胡處	秦家の城を築きて胡に備えし處
漢家還有烽火然	漢家還た烽火の然ゆる有り
烽火然不息	烽火然えて息まず
征戰無已時	征戰して已む時無し
野戰格鬥死	野戰格闘して死し
敗馬號鳴向天悲	敗馬號鳴し天に向かいて悲しむ
鳥鳶啄人腸	鳥鳶は人の腸を啄み
銜飛上挂枯樹枝	銜え飛びて上に挂く枯樹の枝
士卒塗草莽	士卒は草莽 <small>まき</small> に塗れ
將軍空爾爲	將軍は空しく爾 <small>ま</small> が爲す
乃知兵者是凶器	乃ち知る兵は是れ凶器
聖人不得已而用之	聖人已むを得ずして之を用うるを

——去年は桑乾河の畔りに戦い、今年はバミールの高原で戦う。

兵器をシリアの海の水で洗い、馬を天山山脈の雪に埋もれた草原に放つ。萬里に遠征して、兵士は皆な老いぼれた。遊牧民の匈奴は殺戮を「畑仕事」とでも心得て、邊境の黄ばんだ畑には白骨が散らばっている。秦が匈奴を防ぐために長城を築いたところに、漢になって敵襲を告げる狼煙が上がっている。狼煙は燃え續けて、戦は終わらない。荒野で組み討ちあって死に、主を失った馬が天に向かって悲しげにいななく。烏や鳶は人の腸を啄み、くわえて枯れ木の枝の天邊にぶら下げる。兵士は雜草の中に朽ちて、將軍の仕業はまるで空しかった。そこでわかるのだ、武器は凶器、聖人は仕方ないときにだけこれを用いるのだと。

李白は、場面を漢の時代に設定する。そして草原の遊牧民とのはてしない戦争と、その中でむざむざ死んで行く兵士たちの姿を描く。「烏鳶は人の腸を啄み、銜え飛び上に挂く枯樹の枝」は、目を背けたくなるようなおぞましい光景である。この詩が反戦の思いを吐露し、権力者の功名への野心を揶揄することはおおかた間違いないだろう。しかし語られるのはあくまでも遠い漢の時代の昔の物語であり、李白の時代の爲政者を批判する意圖はおくびにも出さない。

李白のこの詩は、意圖をあえて伏せることで傳統的な諷諭の手法によっている。すべてを自分とは関わりが無い他人事のよう語る、それが樂府の作法なのであり、諷諭はその作法の中

杜甫とその時代（松原）

における政治批判の手法なのである。だから樂府を読み解くには、隠れた眞意を読み出す手続が必要とされる。

この李白の詩とよく對比される杜甫の「兵車行」¹⁰⁸⁸が、實際に目にした兵士の出征の場面を捉えて正面から政權を批判するのとは大いに徑庭がある。長い詩なので、冒頭の部分を掲げる。

車轆轤 馬蕭蕭	車は轆轤、馬は蕭蕭
行人弓箭各在腰	行人の弓箭各、腰に在り
耶孃妻子走相送	耶孃妻子走りて相い送る
塵埃不見咸陽橋	塵埃に見えず咸陽の橋
牽衣頓足攔道哭	衣を牽き足を頓し道を攔りて哭せば
哭聲直上干雲霄	哭聲直ちに上りて雲霄を干す ^{おか}
道旁過者問行人	道旁の過る者行人に問えば
行人但云點行頻	行人但だ云う點行頻りなりと

——車はがらがら、馬はひひいん。出征する兵士たちはめいめい腰に弓矢を帯びている。兵士の両親や妻たちは走ってその後を追いかけるながら見送る。車と人が立てる土ぼこりで咸陽の橋も見えやしない。彼らが大事な人を行かせまいとして服を引っぱり足を踏み鳴らしながら道を遮り泣き叫ぶと、その聲はまっすぐに上って行って大空に突き刺さらんばかり。通りすがりの

人が兵士にそのわけをたずねると、兵士はこう答えた。「ひつきりなしに徴兵されるのですよ……」。

この兵車行は、天寶十載（七五二）、杜甫四〇歳の頃の作とされる。玄宗は、領土の擴張のために吐蕃（チベット）と抗争を繰り返した。詩の冒頭には、出征の光景が如實に描かれている。兵士がめいめい腰に帯びている弓矢、それは府兵制の原則によれば自前で調達したものである。兵士たちが渡ってゆく咸陽橋は、長安の北を流れる渭水に架かった橋である。長安から西に向かう者はまず必ずこの橋を渡り、渭水に沿って西行する。こうして杜甫は、吐蕃との戦に向かう兵士が行進する道筋を具體的に描き出す。この描寫の具體性は、耶・孃・妻子たちが兵士の「服を引っ張り、地團駄を踏み、行く手をふさいで」、何とかして出發を引き留めようとする見送りの光景が、事實そのままであったことを印象づけることになる。

道端を通り過ぎる男がいて、出征の兵士に問いかける。兵士はただ徴兵ばかりだと答える。この「道旁の過る者」が誰かを、杜甫は説明していない。しかし讀者にはそれが杜甫自身であると思えるように詩は作られている。樂府の作法では、作者自身は舞臺に登ってはならない。その禁忌を杜甫はあっさり踏み破って、自身を詩の中に登場させ、このことで詩が作者自身の見聞に基づくことを印象づけるのである。

なお追加して注目すべきは、詩の末尾の「君見ずや青海の頭、

古來白骨人の收むる無し」の二句である。「青海」とはモンゴル語でココノール、青海省にある巨大な鹽水湖であり、この一帯が唐と吐蕃の繫争地域となっていた。この青海の悲惨な光景を點ずることで、詩の制作意圖が玄宗による西方侵入の批判にあることを改めて確認しながら詩を締めくくる。

ところで杜甫は、この樂府でもない「兵車行」を樂府に似せて作っている（文學史ではこれを「新題樂府」もしくは「新樂府」と稱する）。そもそも「兵車行」の「行」は、「歌」を意味する樂府の詩題法である。「君不見——君見ずや」の挿入や、長短句を入り混ぜた句作りなどは、いずれも樂府が「歌謠」として歌われたときの面影を杜甫が模倣したものである。しかもこの詩の原注「古樂府に云う、耶娘の子を哭する聲を聞かず、但だ黄河の流水の鳴りて濺濺たるを聞くのみと」によれば、杜甫は古樂府の一節を「兵車行」の冒頭に借用することで、樂府との連續性を演出していたことになる。杜甫は樂府の作法を逸脱してこの詩を作ったにもかかわらず、それでも樂府に似せて見せたのは、政治批判が歴史的に樂府という文學の領分だったことを尊重したためである。

* * * * *

この「兵車行」は、第一に、杜甫と傳統との關係を考えるための恰好の作品となっている。杜甫は、樂府の中に渾然と入り混ざっている諸要素、たとえば不揃いな長短句の混在、擬古樂

府に顯著な先行樂府からの詩句の借用、政治批判、不明瞭な制作意圖の提示などの要素をそれぞれに分解し、その中のいくつかを取り出し再配置することで、眞新しい文學を作り上げた。その個々の要素は傳統の中に根を持ってはいても、そこにできあがった作品は傳統の中にはない獨創の産物だった。たとえば樂府における諷諭とは「不明瞭な形（暗喩）で提示された政治批判」のことだが、杜甫はこの諷諭を二つの要素に分解し、政治批判だけを明瞭な形で取り出すことで、樂府に傳統的な諷諭の手法を破却したのである。

杜甫による新しい政治批判詩の出現は、文學史の事件だった。李白の「戰城南」は諷諭の傳統の中に踏み止まった樂府詩であり、「戰城南」を温めればやがて杜甫の「兵車行」が生まれ来るといふ連続性があるわけではない。二つの詩は、そもそもが別物として作られていた。

「兵車行」は第二に、政治批判詩と、杜甫の根柢にある禮樂的文學觀とが、杜甫の中でどのように折り合っていたかを考える材料となるだろう。貴族の時代には、文學は宮廷文學として朝廷の政治を潤色し莊嚴するものだった。しかしながら本來の儒教の禮樂觀に立ち返るならば、文學は政治の上邊を飾るものではなく、政治と手を取り合って太平の秩序を現出すべく「經國の大業」としての役割を擔わなければならない。杜甫はその理念を誰よりも正直に受け止めていたことになるだろう。善政

杜甫とその時代（松原）

を潤色するのも文學であるが、悪政を批判するのもまた文學である。杜甫はそうに考えて關心を政治のすべての領域まで擴大した。杜甫がこうにして政治批判詩という前人未踏の領域に踏み込んだのは、文學を政治批判の手段に利用しようとする理知的で機能主義的な動機のためではなく、それよりも文學を政治と一體のものと見る古風な信念に突き動かされた結果だった。貴族の時代の禮樂的秩序の中で育まれた文學は、杜甫の中で、とうとう貴族の流儀を踏み越えて、皇帝權力を問題の俎上に据えるところまで膨張したのである。

なお「兵車行」で皇帝權力の批判に踏み込んだとしても、杜甫が皇帝支配の體制に對する批判者となつたわけではなかった。それどころか杜甫の率直な批判の根柢には、禮樂的秩序を主催すべき皇帝への搖るぎない信賴があつたものと思われる。杜甫はやがて華州司功參軍の職を去って秦州に赴く。これ以降、杜甫は政治批判詩を作ることがなくなった。杜甫の前に太平の世が實現してその必要がなくなったからでもない。また杜甫が政治批判詩を作る勇氣を失つたからでもない。おそらく杜甫にすれば政治の批判とは、「君を堯舜に致す」ために、皇帝の信任を得ながら共に手を携えて禮樂的秩序を實現するための方法だった。それゆえに肅宗に追われるように華州を去って秦州に赴いてから、つまり肅宗との間に信賴關係が完全に失われたと杜甫が思い至つた後に、杜甫は二度と政治批判詩を作ることができ

なくなつたのである。杜甫が詩を作ることは、たといそれが皇帝權力に對する批判であつても、天下の主宰者である皇帝の秩序を翼賛する行爲に他ならなかつたのである。⁽¹⁾

おわりに

杜甫は、詩の力を信じて世界と正面から對峙した。この姿勢を可能にしたのは、最も大事な杜甫の個性をひとまず別とすれば、生まれ合わせた時代の獨特の状況だった。宮廷の中で育まれた禮樂的秩序と、その體現としての宮廷文學は、杜甫が生まれたとき、身近にまだ息づいていた。さらにそこには玄宗の開元の治がもたらした開放的な雰圍氣があつた。玄宗は才を愛して、周圍に人々を惹き寄せようとしていた。杜甫はその時代の空氣を呼吸する中で、詩は以つて世界と對峙しうるといふ確信に達したのである。

杜甫は、詩の制作を造物者の營みと通底する根源的な營みへと下ろすことによつて、杜甫の詩は傳統の制約を脱して、無際限の表現空間を獲得する。それが詩を引つ提げて世界に立ち向かうときの心強い武器となつた。

杜甫のこの考えは、文學的造形は造物者と功を争う高みにも達するという中國流の藝術至上主義の考え方と紙一重のところにある。しかし兩者は畢竟、まるで異なる文學觀に基づくものだとしなければなるまい。その點に簡單に觸れて杜甫の中國文

學史における獨特の位置を確認しておきたい。

いわゆる藝術至上主義の立場によれば、文學はそのものとして自律的な原理を持ち、自己完結的であつて他の價值尺度から自由である。そのような文學において獲得された表現の靈妙さは、あたかも最も靈妙である造物者の功に匹敵する。だが造物者と文學とはそもそも別個の原理に屬するものであるから、兩者がじかに感應し合うような神祕主義の哲學は、この藝術至上主義の立場からは排除されるのである。このような考えが一方にあるときに、杜甫の文學觀は對極的なものだった。文學の創造はそもそも造物者の根源の營みと相い通じるものなのである。

だから文學は造物者の世界の有機的で不可分の要素である。またそれゆえに文學は世界の隅々まで關與しうるものと考へたのである。この考えは、古くは儒家の禮樂觀に根を持ち、また近い過去における宮廷の儀禮的空間において政治と文學が一體であつた時代を想起しながら、文學の空間を、宮廷の狭い儀禮空間から造物者の世界の全體に、つまり天地の間の森羅萬象と、皇帝が掌る天下の政治と人々の生活が繰り廣げられる世界に向けて發展させるものだった。

杜甫の中では古さが新しさと絡み合い、部分が全體と分かちがたく結び付けられる。こうして互いにひしめく力を内部に抱え込むことで、杜甫は中國文學史にひときわ複雑な表情を持つ詩人となつたのである。

【注】

- (1) 松原「杜甫の華州司功參軍時期についての覺書——併せて閻琦・王勳成の免官説の検討——」（中國詩文研究會『中國詩文論叢』第三〇集、二〇一一年）。
- (2) 松原「杜甫の〈詩の死〉——そして秦州における詩の復活——」（『生誕千三百年記念 杜甫研究論集』（研文出版、二〇一三年）。
- (3) 松原「杜甫と裴冕——成都草堂造營をめぐる覺書——」（專修大學學會『專修人文論集』九一號、二〇一二年）。
- (4) 松原「杜甫の百花潭莊——浣花草堂のもう一つの顔——」（中國詩文研究會『中國詩文論叢』三三集、二〇一三年）。
- (5) 陳尙君「杜甫の離蜀後の行跡に関する考察」（翻譯・石井理、『生誕千三百年記念 杜甫研究論集』研文出版、二〇一三年）。
- (6) 松原「杜甫夔州詩考序論——尙書郎就任を巡って——」（早稻田大學中國文學會『中國文學研究』二九期、二〇〇三年）。
- (7) 松原「杜甫の詩の〈放〉——江陵時期における新しい詩境——」（全國漢文教育學會『新しい漢詩漢文教育』五〇號、二〇一〇年）。
- (8) 王勳成「杜甫初命授官説」（『唐代文學研究』一一輯、二〇〇六年）、同「杜甫授官・貶官與罷官説」（『天水師範學院學報』二〇一〇年第四期）、また韓成武・韓夢澤「杜甫獻賦出身而未能立即得官之原因考」（『杜甫研究學刊』二〇〇八年第三期）。
- (9) 松原「杜甫の没落者を詠ずる詩——禮樂的秩序への追想——」（中國詩文研究會『中國詩文論叢』第二五集、二〇〇六年）。
- (10) 松原「杜甫の詩に見える〈石〉——詩的認識における「型」の解體——」（中國詩文研究會『植木久行教授退休記念 中國詩文論叢』三三集、二〇一四年）。
- (11) 注(2)所掲の松原論文參照。
- 〔補記〕 本稿は、『杜甫全詩譯注』（假稱、講談社學術文庫、二〇一六年刊行豫定）の敍論の草稿である。
- 〔附記〕 本稿は、專修大學中期研究員期間中の「杜甫の望郷意識の研究」の研究成果の一部である。